

はじめに

この本の表題をご覧になって、「何で今頃になって？」という疑問をお持ちの方は多いかもしれません。確かに、福島第一原子力発電所事故を契機にして、多くの個人や学術・技術団体が放射線の人体影響に関する書籍を出版してきました。事故から4年を迎えようとする今となつては、情報が最も必要とされていた時期を逸した感否めないかもしれません。

本書の編集に携わった日本放射線影響学会^{注1}のメンバーは、福島第一原発事故発生から間もなく、それぞれの専門の立場で市民の皆さんに情報を伝えるために研究室を飛び出しました。2011年3月18日、「市民の皆さんが自身で納得できる判断をするための科学的な情報を伝えたい」という方向を同じくする有志が集まって、ホームページを通じたメールによるQ&Aを開始しました。事故後に多数寄せられたメールや電話でのやりとりから、私たちは「顔が見える直接対話」の必要性を感じ、同年秋から、複数講師による対話型講演会開催への取り組みを開始し、その後、少人数の市民の皆さんとの膝詰め対話という形で今も活動を継続しています。この3年半あまりの活動で、「自分の頭で理解して判断し、地域を守るために、たとえ小さくてもできることから自立して取り組む」ことを続けている多くの市民の方とお会いしました。この経験は私たちに、ある緊急事態に直面したとき、市民の皆さんとともに行動できる、専門的な情報のある程度理解した方が、それぞれの地域に居ることがいかに重要であるかを強く感じさせました。ここでいう「ともに行動できる方」とは、具体的には学校の教師であったり、役場の窓口の方であったり、自治会やPTAの役

<注1>日本放射線影響学会は、1954年の第五福竜丸事件を契機に、日本人が組織する放射線影響に関する専門家集団を志した先人たちによって結成された学術団体で、放射線がヒトや生物・環境に与える影響を研究する専門家が所属している学会です。

員など、本当に身近で顔が見える方のことです。命に関わる情報は、「誰が発信したか」が受け手の理解と判断に大きく影響し、発信者の理解度は受け手の理解度にも大いに影響します。その一方で、原発事故発生当時はもちろん、今でもなお、地域のリーダーとなる方々が放射線の健康影響に関する科学的な情報を整理し、理解した上で自信を持って発信するのに最適解説書は不十分であることに気付きました。

放射線の影響を書いた本は多数出版されていますが、私たちが知る限り、これらの書籍の情報量は、非常にわかりやすくするために贅肉を極限まで削ぎ落とした書籍と、ある程度専門知識を持つ人向けに書かれた書籍の2つに大別され、わかりやすさと科学性を両立できる簡潔な書籍がほとんどありません。また、中には科学的な情報に基づいているとは思えない書籍もあり、結果として、「何が本当で、何を元に判断すればよいのか」が見えてこない状況が続いているように感じています。もちろん、この本の解説が私たちの掲げる要件を十分満たしているとは言えないかもしれませんが、できるだけ簡潔な解説と理解の手助けとなる図や表とを組み合わせせてお示しすることを心がけました。本書は、市民と直接対話される自治体職員の方や学校の先生、地域のリーダーとして活動されている方々のために、これからの放射線リスクコミュニケーションに必要なテーマを厳選し、各テーマについて、平易でなおかつ科学性を維持した解説と図説を使ってまとめました。加えて、科学的な情報を伝える上で何が問題であったか、これから何が必要なのかを座談会形式でまとめました。「本当の専門家」が集まる集団として、私たちが「何をして、何を感じ、どう対応してきたか」を市民代表の方とともに語ったメッセージも含めてお読みいただければ、「なぜ今なのか」をご理解いただけるものと考えております。本当の専門家として、私たちが市民の方とともに経験したことが未来につながれば幸いです。